

無痛分娩マニュアル

みなみ野グリーンゲイブルズクリニック

【当院が提供する無痛分娩について】

陣痛の痛みに対して不安や恐怖を感じておられる方の陣痛の痛みの軽減を希望される妊婦さんに対して、出産に対して前むきに臨めるようにしていただくことを目的としております。お産の主役は妊婦さんご自身です。私達スタッフは、安全で安心なお産をしていただくためにできるだけ寄り添い支えていきますが、素晴らしいご自身の力を信じてお産をしていただきたいと思います。そのための方法として当院で提供している無痛分娩の方法をご説明いたします。

無痛分娩外来では麻酔専門医による説明を行っております。できれば直接の説明をお聞きいただきご質問等あればお聞きください。メリットデメリットについて納得して受けていただくことをお勧めしています。

【方法】

A.硬膜外カテーテル挿入による方法

- (1) 基本的に計画分娩とともに行います。麻酔科専門医による施術になります。硬膜外麻酔と言って背中から硬膜外カテーテルという管を入れて麻酔薬を注入する方法を取ります。これは手術の時に使っている麻酔方法です。手術台の上で麻酔をかけている状態であることには変わりありません。バイタルサインなどの測定を随時行います。
- (2) 妊婦さんの状態を観察して、体温測定、血圧測定、呼吸状態、脈拍測定、血中酸素濃度の測定、NSTなどを行います。
- (3) 無痛分娩が行える状態であることが確認できたら、体位を取ります。
- (4) 背中の消毒、局所麻酔、カテーテルの挿入と試験注入による確認を行います。
- (5) 麻酔の効き具合などを確認するために、慎重に薬液の注入後の状態を観察します。
- (6) 促進剤の点滴による陣痛をおこす処置を行います。
- (7) 有効陣痛が発来して痛みが出現した段階で、順次麻酔薬の注入を行います。
- (8) 子宮口が全開大してからは腹圧がかけられるように調整しおおむね分娩第2期を2時間以内に終わる様にします。
- (9) あらかじめ血圧低下などを予防するために点滴で輸液を行います。
- (10) お産が終了しましたら、硬膜外カテーテルを抜去します。以後は通常のお産後と何ら変わることはありません。

B.筋肉注射による和通分娩

ペチロルファンという薬液の筋肉内注射で、陣痛の痛みを和らげる方法もあります。

硬膜外麻酔に比較すると痛みのコントロールは十分でない場合が多いですが、複雑な処置を伴わないというメリットもあります。眠気や吐き気などの副反応がある場合があります。

【計画分娩について】

計画分娩の方法としては、子宮口の状態で、誘発剤の点滴では陣痛が起きそうもない場合にはメトロイリンテルという水を入れた風船を入れる場合もありますが、その後はオキシトシンという誘発剤の点滴をします。陣痛が起こせるかどうか、という判断は外来での内診所見によります。お一人お一人時期と方法は異なります。

【硬膜外麻酔法によるリスクとデメリット、合併症について】

①微弱陣痛

陣痛が弱くなることがしばしばあります。その結果分娩時間が長引いたり、吸引分娩などの器械分娩をせざるをえなくなったりすることがあります。

②発熱

長引くと熱が出る場合があります。

③血腫

カテーテルが入っているところに血の塊が出来る場合があります、神経を圧迫する時には取り除かなければなくなることがあります。稀に神経障害が起きることがあります。

④血圧低下

麻酔薬の作用で血管が広がるために血圧が低下することがあります。その場合には中止すること、輸液を多くするなどの対応が必要になることがあります。

⑤脊椎麻酔になってしまうこと

硬膜が傷つくことで脊椎麻酔になることがあります、場合によっては胸から首の近くまで麻酔が効いて呼吸障害などの合併症が起きることがあります。

⑥頭痛

頭痛が起きたり、出産後まで長引くことがあります。

⑦排尿障害

麻酔のレベルによっては排尿障害が起きることがあります。麻酔薬が切れると治りますが、人により長引くこともあります。

⑧感染

カテーテルが挿入されているところに細菌感染が起きることがあります。

⑨腰痛、背部痛、足のしびれなど

カテーテル挿入部の痛みや腰痛、麻酔薬の効き方によっては足がしびれたり感覚が鈍く成ったりすることがあります。

⑩局所麻酔中毒

麻酔薬によって麻酔薬中毒が起きることがあります。

以上実際の方法についてご説明です。

ご質問などは随時受け付けておりますので、ご遠慮なくお申し出ください。